

[課題演習報告]

若年教員の授業力向上に関する研究 —複数体制による授業実践型と授業観察型の課題解決サイクルを通して—

塩 足 和 代
Kazuyo SHIOTARI

福岡教育大学大学院教育学研究科教職実践専攻スクールリーダーシップ開発コース
学校運営リーダープログラム
小郡市立三国小学校

(2024 年 1 月 10 日受理)

本研究は、複数体制による課題解決サイクルを位置付け、授業実践と授業観察を繰り返すことを通して、若年教員の授業力の向上を図ることを目的とした。そのために、若年教員の課題解決のためのペアリングを学年内で行い、ペア教員とともに若年教員が自分自身の課題を見つめ、自分に合った目標設定をした上で、授業観察と授業実践を繰り返しながら、課題解決のための手立てや技術の理解を深め、授業力の向上を図ることができるかどうかを検証した。その結果、ペア教員と目標を共有することで、授業観察や授業実践の際の視点を明確にすることができた。また、授業実践と授業観察を繰り返すことで、若年教員の「振り返りの位置付け」や「発問」などの授業展開力を伸ばすことができ、若年教員の授業力向上につながった。

キーワード：複数体制，課題解決サイクル，若年教員，授業力向上，授業観察，授業実践

1 主題設定の理由

(1) 社会の要請から

文部科学省は、令和4年8月、「変化の激しい時代において、学校教育を取り巻く環境の変化を前向きに受け止め、主体性を発揮しながら、個別最適な学び、協働的な学びにより、教職生涯を通じて学び続けるといった新たな教師の学びを実現する観点から、改正教育公務員特例法を受け、より効果的な教師の資質向上を図るために改正するもの」¹⁾と教員としての資質の向上に関する指標の作成に関する指針改正のポイントを述べている。その中でも、「教師に共通的に求められる資質能力を、①教職に必要な素養、②学習指導、③生徒指導、④特別な配慮や支援を必要とする子供への対応、⑤ICTや情報・教育データの利活用の5つの柱で再整理したこと」「教師同士の学び合いを通じた協働的な学びの機会確保などの研修の活性化」の2点に着目する。その一方で、福岡県教育センター(2020)は、「教員の大量退職、大量採用の影響

により、先輩教員から若年教員への知識・技能の指導、伝承が十分には機能しなくなっている現状がある。(中略)学校の教育力を維持、継承していくためには、教員個々が日常的に学び合うことを意識しながら業務に関する情報を共有したり、実践を協働したりすることが必要だ。」²⁾と述べている。これらのことから、若年教員を含む全ての教員が資質向上のために日常的に学び合うことのできる場の必要性を強く感じた。

(2) 在籍校の実態から

在籍校は、児童数966名、学級数42学級(特別支援学級12学級を含む)、教職員数72名の大規模校である。本年度も含む近年4年間は、毎年2～3名ずつの初任者が配置されている。本年度、経験年数5年目までの教員(講師も含む)が、42学級中17学級の担任をしている。6学年中、半数の学年は、経験豊富なベテラン教員より若手教員の配置が多くなっている。若手教員の中には、学校全体に関わる校務分掌を推進する立場を任されている者もいる。また、各学年5学級に、ベテラン・中堅・若手と経験年数のバランスを考え、配

置されている。毎週行われる学年会を通じて、学習内容や進度、学年での取組等の共通理解を図り、日々の教育活動に臨んでいる。しかし、教員間に教育的実践力の差が少なくとも生じていると考えられる。一番身近な組織「学年会」を、若年教員をはじめ全ての学年教員が、日常的に学び合い、資質向上を図ることのできる場にできないかと強く感じた。そこで、本研究では若年教員の資質能力のうちの「授業力」に視点を当て、本研究主題を設定した。

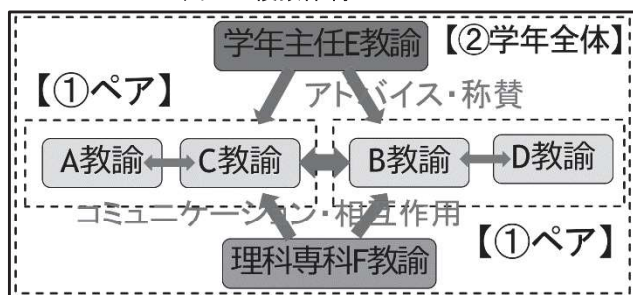
2 研究主題・副題の意味

(1) 「若年教員の授業力向上」とは

本研究における「若年教員」とは、「福岡県教員育成指標（令和4年12月改訂版）」に示された「基礎・向上期（1～6年）」に当たる教員のことである。「授業力」とは、「福岡県教員育成指標（令和4年12月改訂版）」に教員の経験年数に応じて必要とされる資質・能力のうちの「学習指導力」のことである。福岡県教員育成指標では、「学習指導力」は、授業構想力、授業展開力、授業評価力や改善力の3点から構成されている。本研究における「授業力」とは、前述の「授業構想力」「授業展開力」「授業評価力や改善力」の3点で捉える。表1の「授業力」に関するアンケートは、「福岡県教員育成指標」や福岡県教育委員会が作成した「授業チェックリスト」をもとに、授業力向上のために必要な項目を具体化して作成したものである。

(2) 複数体制における課題解決サイクルとは

図1 複数体制について



「複数体制」とは、課題解決サイクルを学年で行う際の形態のことである（図1）。の形態には、「①ペア（もしくはトリオ）」「②学年全体」がある。「①ペア」は、目標達成・課題解決のための形態である。「②学年全体」は、各ペアの取組を共有するとともに、若年教員のよさや頑張りを認め合い、自信や成長の実感を促すための形態である。その際、学年主任は、各ペアにアドバイスをしたり、称賛・承認の声掛けをしたりするなどして働

きかけ、若年教員が自信をもって成長することを促すことができるようにする。

「課題解決サイクル」とは、図2のようなサイクルにおいて授業実践を繰り返し、積み上げていくことである。福岡県教育センター（2020）は、「質の高い問題解決的な学習活動を体験することは、子供の学びだけでなく、教員の資質・能力の向上を図る研修にも当てはめて考えることができる。」³⁾と述べている。その上に立ち、「課題解決サイクル」を繰り返し行うことは、若年教員が自分自身の課題を見つめ、目標を設定し、授業実践を繰り返ししながら課題解決のための手立てや技術を理解したり使ったりして、それらの成果と課題を振り返り、新たな目標へとつくりかえながら、自らの授業力向上につながると考える。目標設定の段階では、自分自身の授業を見つめ、目標を設定できるという「授業構想力」を、ペア実践の段階では、課題解決のための手立てや技術を理解したり使ったりすることができるといいう「授業展開力」を、また、振り返りの段階では、成果と課題を振り返り、新たな目標につくりかえることができるといいう「授業評価改善力」の向上をねらう。

図2 課題解決サイクルについて

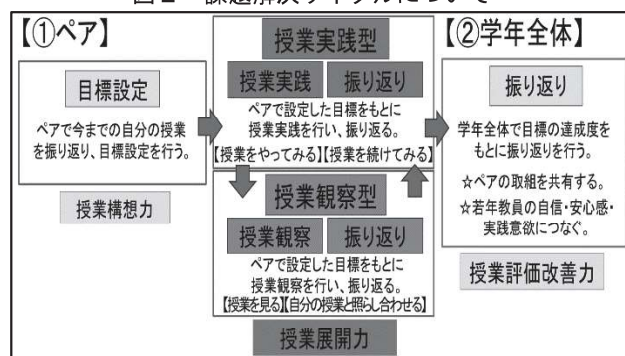


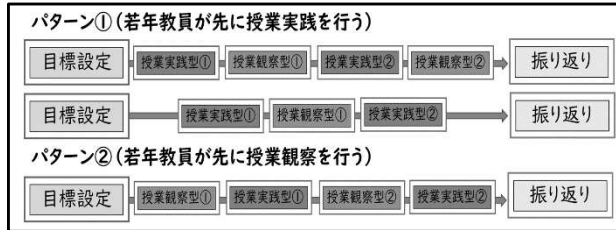
表1 「授業実践型」と「授業観察型」の目的

授業実践型	授業観察型
○若年教員が、ペアで設定した目標をもとに授業実践を行い、目標達成や課題解決に挑むことができる。	○若年教員が、ペア教員の授業を参観し、目標達成・課題解決のための方策を得たり、得た方策を自分自身の授業に活かすことができる。
・自分なりに考えた目標達成・課題解決のための方策で授業実践ができる。	・自分の授業と照らし合わせて授業を観察することができる。
・ペア教員の「よさ」を自分の授業実践に取り入れたり、活かすことができる。	・ペア教員の授業の「よさ」に気付くことができる。

ペアで設定した目標をもとに若年教員が授業実践をし、振り返りを行う一連の流れを「授業実践型」とする。また、ペアで設定した目標をもとに若年教員がペア教員の授業を観察し、振り返りを行う一連の流れを「授業観察型」とする。この「授業実践型」と「授業観察型」をペアの状況に応じて繰り返していく。また、「授業実践型」と「授業観

察型」の課題解決サイクルには、表1のような「よさ」を若年教員が得られることをねらっている。ペアで設定した目標や実施する教科、若年教員の力量、授業に対する自信の程度によって実践の順序や回数など、課題解決サイクルには図3のようなパターンが考えられる。

図3 課題解決サイクルのパターン



また、課題解決サイクルを実施する際に、「①信頼（共感・傾聴・誠実さ）」「②ペーシング（無理のない働きかけ）」「③承認（承認・実践意欲）」「④率先垂範（師範・自己変革の提示）」の4点で「対話やかかわり方の心構え」を提示する。「対話やかかわり方の心構え」を提示することで、若年教員とペア教員が、何でも気軽に話すことのできるようにするとともに、若年教員の授業実践を支援し、気付きを促すことができるようにする。また、そうすることで若年教員が納得して授業実践を行うことができると考えた。

3 研究の目的

複数体制による授業実践型と授業観察型の課題解決サイクルを行うことを通して、若年教員の授業力向上の在り方について究明する。

4 研究の仮説

複数体制による授業実践型と授業観察型の課題解決サイクルを位置付け、課題解決のためのペアリングを学年で行い、ペア教員とともに若年教員が自分自身の課題を見つめ、目標設定した上で、授業実践と授業観察を繰り返していけば、授業構想力・授業展開力・授業評価力や改善力を高め、若年教員の授業力向上を図ることができるだろう。

5 仮説説明のための具体的方策

- (1) 若年教員の実態把握のための「授業力」に関するアンケートの実施
- (2) 若年教員の課題解決のためのペアリング
- (3) 複数体制による課題解決サイクルの位置付け
 - ①ペア教員とともに目標設定

- ②授業実践型と授業観察型の実施
- ③学年全体で行う振り返りの実施
- (4) 振り返りの進め方の活用

6 研究の実際

(1) 「授業力」に関するアンケートの実施

若年教員が、自分自身の授業を振り返るために、また、若年の先生方が感じている授業に対する思いや悩みなどを把握するために「授業力」に関するアンケートを実施した。アンケート結果(表2)より、A教諭・B教諭ともに、「発問」「振り返り」「学習規律」のポイントが低いことが分かった。アンケート実施後、A教諭は、「算数科で、図や式をつなぎ自分の言葉で説明できるようになってほしい。」B教諭は、「自分の学級でも授業中の発言が少ない。子どもたちの発言が活発になる授業を組み立てたい。」と話していた。

表2 「授業力」に関するアンケート結果
(令和5年6月3日学年会後実施 4件法)

O授業振り返りアンケート結果		A教諭	B教諭
授業構想力	①学習指導要領にもとづき、教材研究を行っている。(教材研究)	3	2
	②年間指導計画にもとづき、計画的に授業を行っている。(単元計画)	4	4
	③1単位時間の主眼を明確にして、授業に臨むことができる。(展開構想)	3	3
授業展開力	①めあてを必ず板書し、学習意欲を喚起している。(めあてづくり)	4	4
	②学び方の積み上げを行い、学習の見通しをもたせることができる。(見通し)	2	3
	③子どもの考えを広げ深める発問を考えることができる。(発問)	2	1
	④子どもの考えの変容が分かる構造的な板書をつくることができる。(板書)	3	3
	⑤子ども同士が関わり合い、考えを広め深めるための対話活動を位置づけることができる。(対話活動)	3	3
	⑥子どもに学びを自覚させるための振り返りを位置づけることができる。(振り返り)	2	2
	⑦ノート指導や学習規律など授業に臨む環境が整っている。(学習規律)	2	2
	⑧ICTなどの教材・教具を効果的に活用することができる。(ICT活用)	3	3
授業評価改善力	①子どもの学習状況の確に見取ることができる。(児童理解)	3	3
	②子どもの学びの姿(考え・言葉・行動)を質し価値付けすることができる。(質質価値づけ)	3	3
	③自分の授業を振り返り、よさや不十分さ、改善点を明らかにすることができる。(授業改善)	1	3

(2) 若年教員の課題解決のためのペアリング

若年教員が、日々の授業への思いや悩みを出し合い、課題解決をよりよく行うことができるようにするために学年主任を中心に学年内で話し合い、ペアリングを行った。

表3 令和5年6月13日(火) 学年会記録

学年主任 E 教諭:ペア教員 A は、算数科の研究の経験もあり、算数の授業が得意。また、ペア教員 B は昨年度より社会科でプレゼンを提示する等工夫して授業を行っていた。
--

表4 第6学年によるペアリング結果

算数科ペア	若年教員 A:3年目(在籍校で講師経験あり) ペア教員 C:13年目(研究主任)
社会科ペア	若年教員 B:4年目(講師経験なし) ペア教員 D:5年目(在籍校で講師経験あり)

表3のように、学年主任 E 教諭が把握していたそれぞれの教員の得意教科や授業の積み上げの様子

等をもとに、学年教員間でペアリングを行った。

(3) 複数体制における課題解決サイクルの実施

在籍校第6学年において、複数体制における課題解決サイクルの実践を進めていった。その際、「信頼関係（共感・傾聴・誠実さ）」「ペーシング（無理のない働きかけ）」「承認（承認・実践意欲）」「率先垂範（師範・自己変革の提示）」の4点で「対話やかかわり方の心構え」を提示した。この報告書では、算数科ペアでの実践を中心に報告する。

① ペア教員とともに行う目標設定

若年教員が、自分自身の授業を振り返り、行いたい授業像を明確にして目標設定を行うことができるようにするために図4のような手順を示した。『①「授業力」アンケートの結果（表1）をもとに、着目したい項目を決める②その項目を選んだ理由を出し合う③どのような授業（手立てや方策）を行うのか④どのような子どもの姿が見られればよいのか』の4点である。

図4 目標設定の視点の提示

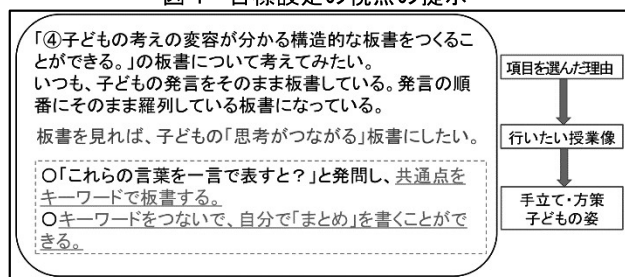


表5 算数科ペアの目標設定の記録

ペア教員C: 着目したい項目はどこになりますか？
若年教員A: 私は、「めあて」「発問」「対話活動」「振り返り」です。その中でも「振り返り」です。なかなか「振り返り」まで行きつかない。時間が足りない。
ペア教員C: 振り返りが出来れば、主眼も明確になる。評価のポイントが明確になる。（授業）内容が捉えられている時には、めあても書けるし、振り返りも書ける。まさに子どもが自分の「学びを自覚」できる。⑦【承認（価値づけ）】
若年教員A: だからこそ、授業終わりに「振り返り」ができるようになってほしいです。
ペア教員C: 振り返りの視点を示してみてもどうか？「①分かったこと」「②学び方について」「③次の学習に向けて」の3つで。「①分かったこと」は「まとめ」と同じになると思う。なので、「②学び方（方法）」に焦点化してみてもいいかもしれないね。④【ペーシング（実現可能な代案の提示）】

若年教員Aの授業の終末場面の「振り返り」が十分にでないという実態から、目標設定を行った。その際、ペア教員Cのどのような「振り返り」を行うことができればよいのか、どのような視点を示せばよいのかという実現可能な代案を提案するとともに、「振り返り」について授業レベルの具体的な姿を目標設定で明らかにすることができた（表5下線⑦④）。

②授業実践型と授業観察型の実施

ア 授業観察型①：ペア教員C算数科「比」の授

業実践

ペア教員Cの授業から、若年教員Bが学びたいという思いをうかがうことができた（表6）。常に若年教員Bは、「自分の授業で取り入れるならどうするか。」という視点を持ち、授業を観察したり、その後の振り返りに臨んだりしていた。ペア教員Cが行った授業後の振り返りでは、若年教員Aがペア教員Cの授業のよさをいくつも見つけ、伝える姿が見られた。また、ペア教員Cは、今回の授業実践を行うに当たって、授業づくりの際に大切にしている考え方を授業場面とつなぎながら若年教員Aに伝えていた。

表6 算数科ペアの授業観察型①の振り返りの記録

若年教員Aの授業観察後の振り返り
【若年教員Aが見つけたペア教員Cの授業のよさ】
・子どもの考えを全体に共有する「手立て」や「発問」
・タブレットの共有機能を活用して、ノートの記録を全体で共有し、友だちが説明する場を設定していたこと。
・自分の考えの強化や自分の考えに自信のない児童は、考えをつくるきっかけとなっていた。
・数や式の意味を丁寧に確認していた。
【「まとめ」「振り返り」の視点で】
・めあてを教師が提示するのではなく、子どもが自分なりのめあてをたてていた。授業で何を解決するのか、子どもたちが分かっていた。

ペア教員Cとの振り返りでは、若年教員Aは、「振り返り」や「まとめ」を充実させるためには、1単位時間の授業の組み立て方や単元構成の大切さに気付くことができた。授業後、ペア教員Cの授業実践後、研究者は若年教員Aと話す機会があった。その際に、若年教員Aは、研究者に表7のように話をしてくれた。

表7 授業観察型①後の若年教員Aへのインタビュー

若年教員A: 考えをつくる段階の机間巡視の際や全体で考えを交流する際に、数や式の意味を子どもたちに問い、確認するようにしている。「どうして、友だちはこう考えたのかな？」と問い、友だちの考えを説明する場を設定するようにしている⑦。【率先垂範による自己改革】
（中略）二つの式の意味を説明したり、友だちがどうしてこのように考えたのか説明したりする姿がとても面白かった④。【率先垂範による自己改革：】

若年教員Aは、ペア教員Cの授業観察の際に見つけた「数や式の意味を必ず子どもたちに問う」「友だちの考えを説明する場を設定する」という「よさ」を自分の授業に取り入れていた（表7下線⑦）。そうすることで、授業内での子どもたちの対話が活発になり、若年教員Aは、授業の面白さを実感することができたようだ（表7下線④）。イ 授業実践型①：若年教員B算数科「比」の授業実践

ペア教員Cの授業実践を受けての若年教員Bの授業実践を行った。若年教員Bは、授業実践前にも、再度目標設定の確認をペア教員Aと一緒に

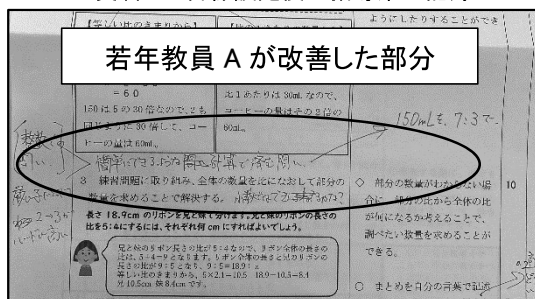
い授業実践に臨んだ(表8)。

表8 授業実践型①の目標設定の様子の記録

<p>ペア教員C:80%以上の子どもが、自分の言葉で「まとめ」が書けるという目標は、授業の実際の姿と照らし合わせて振り返るよい機会になると思う。「書けたと思っていた子が書けなかったのはなぜか。逆に、80%以上の子どもが振り返りを書くことができたのはなぜか。」このような視点で授業を振り返ることができたらよいと思う。㊦【ページング:具体的な代案の提示】</p> <p>若年教員A:もしかしたら、振り返りの時間をとることができないかもしれない。</p> <p>ペア教員C:算数の場合、適用問題(練習問題)を、今日学んだ内容(数理)を活かして解けるか、自分が納得した解き方を選んで解けるかも振り返りの姿だと考えている。なぜ、この問題を解かせようと思ったの?</p> <p>若年教員A:小数の場合でも(整数と)同じように考えることができることをつかませたい。前時の教科書の練習問題でも「整数・小数・分数」の順序で練習問題が示されていたので同じように考えて練習問題を設定した①。</p> <p>ペア教員C:もしかしたら、子ども達にとってハードルが少し高いかもしれない。この練習問題の前に、簡単な計算でできる整数の場合の練習問題を提示してみるとよいかもしれないよ。㊦【ページング:具体的な代案の提示】でも、A先生が考えている通りに進めてみて。A先生なら大丈夫だよ。【承認:後押し】</p>	
--	--

若年教員は、自分なりの授業像を明確にして、ペア教員との目標設定に臨んだ(表8下線①)。ペア教員の助言(表8下線㊦㊧)を聴いて、2点の改善を行った。1つ目は、『自分の学びを自覚できる振り返りを行う。そのために、「学び方」「次の学習へ・生活と結びつけて」という視点を提示する』と目標を設定していたのだが、「自分が納得した方法で練習問題を解くことができたか。」という目標に変更したことだ。2つ目は、資料1のように授業の終末場面の練習問題の前に、簡単な数値の問題を挿入し、学びの定着を図ることができるように授業の流れに改善したことだ。このような若年教員Aの姿から、課題解決のための目標を設定・改善し、授業をよりよくしようとする授業構想力の姿を見ることができた。

資料1 目標設定後の指導案の記録



授業実践後、若年教員Aが、「振り返りの時間が足りませんでした。自分の考えを創る時間を長くとりすぎてしまいました。でも、やっぱり、簡単な数値の問題をいれておいてよかったです。あのまま小数の練習問題を解かせることはできません

でした。」と話に来てくれた。この話を聴いて、授業後の振り返りでは、「うまくいかなかったこと」を振り返る場ではなく、ペアや学年で解決策やよりよい方法をさぐることのできる振り返りの場にしたいと思った(図5)。

図5 授業実践型①の振り返りの場に向けて

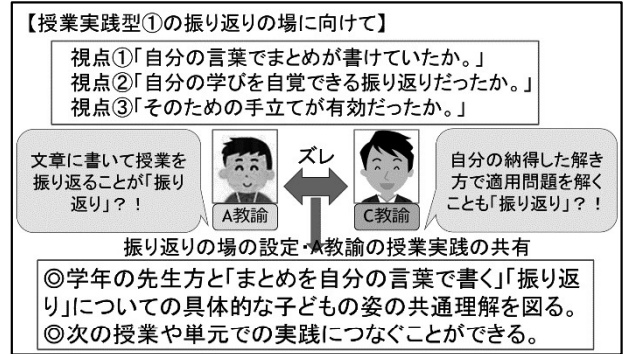


表9 授業実践型①の振り返りの記録

<p>若年教員A:「全体の比を求める」というキーワードを使ってまとめを記述できていたのは半数でした。数や式の意味を大切にしながら授業を進めることはできた。しかし、(中略)自分の考えをつくるのに時間が掛かり過ぎた。</p> <p>ペア教員C:「$2:3=X:Y$」の式を出して、「これでいいの?」とA先生が問う場面があった。ここが私は一番今日の授業の中で好きでした。㊦【承認:よさの承認・自信につなぐ】この問いかけがもっと早い段階で出たらよかった。そして、前時との違いは何か?「全体の量」に着目すれば、今日の部分の量が求められそうだとめてあてにつなぐとよかった。㊦【ページング:実現可能な代案の提示】</p> <p>研究者:振り返りができるとはどんな姿ですか?</p> <p>ペア教員C:算数の振り返りは、「まとめを自分の言葉で書けること」「自分の納得した方法で問題が解けること」の2点だと考えている。自分もいつもはできないのだが、【信頼関係:共感・誠実さ】難易度の異なる練習問題を3問くらい提示する。レベル3まで解きたかったけど、レベル2までしか解けなかった。できると思った子は、レベル3から解いて、自分ではできるようになったんだと思えばいい。㊦【ページング:実現可能な代案の提示】</p> <p>若年教員A:(前時とつないで)「今までと同じ方法ではできない。」という思いを抱かせることが、めめてや見通しを持たせるために必要だと思った。㊦(中略)練習問題も、単純に複雑にすればよいのではない。教科書の問題の意図を考えなければならない。㊦【率先垂範による自己改革】</p> <p>ペア教員C:液量が長さ変わっただけで、整数での数値設定だった。「(今までと同じ方法で)できそうだけど、なぜできないの。」と子どもたちに思わせることが大切。㊦【ページング:ページング:実現可能な代案の提示】</p>	
--	--

今回の授業実践で、「振り返り」に焦点を当てることで、若年教員Aとペア教員Cの「振り返り」に対する捉え方に多少のズレがあるのではないかと考えた。若年教員Cの授業実践を振り返りで共有することで、「まとめを自分の言葉で書くことができる」「振り返りができる」子どもの姿の共通理解につなぐことができるのではないかと考えた。そのような思いをもち、若年教員Aの授業実践の振り返りを行った。

ペア教員Cは、若年教員Aの授業のよさ(表9下線㊦)を述べた上で、子どもたちの具体的な発

言等を述べながら、具体的かつ実現可能な助言(表9下線④)をしていた。また、「振り返り」についても、ペア教員Cは、自分の授業での取組を提示しながら、決して長い文章が書けるだけが「振り返り」ではないこと、自分の納得した方法で練習問題を解くことが「振り返り」になることを、若年教員Aと共通理解を図ることができた(表9下線⑤)。そして、振り返りを充実させるためにも「めあて」や「見通し」を持たせるための工夫が必要だということに気付くとともに次の実践意欲へとつなぐことができた(表9下線⑥⑦)。

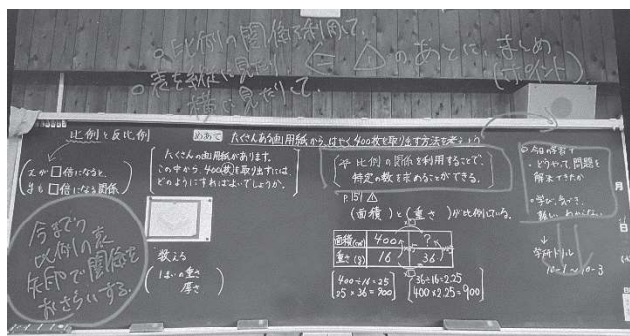
ウ 授業観察型②：学年主任E教諭算数科「拡大図と縮図」の授業実践

若年教員Aの授業実践型①の授業を受けて、学年主任のE教諭が授業実践を行った。授業実践型①の際に、若年教員が振り返りの際に述べていた「どのようにめあてにつなぐか」「自分の納得した方法で問題を解くことができるか」という2点に焦点を当ててE教諭が授業を行った。授業観察をし、若年教員Aは、「考える必然性の生まれるめあてにするための導入場面や計算しやすい縮図の長さや縮尺を自分で決めて問題解決をする場面に学びがあった。」と話してくれた。

エ 授業実践型②：若年教員A 算数科「比例と反比例」の授業実践

若年教員Aは、実践①の振り返りを活かして、実践②に挑んだ。前時まで学習した2量の比例関係を使って、表を横に見たり、縦に見たりして、特定の数を求めることができることを捉えさせる授業場面である。

資料2 授業実践型②の際の授業板書の記録



資料2は、若年教員Aが行った授業実践型②の授業実践の板書である。「振り返り」につなぐために「めあて」を大事にする。そのために、前時の学習とのつながりやズレに気付かせることができるように、導入部分を工夫したいという若年教員Aの授業づくりへの思いが、資料2の板書への書き込みからうかがうことができる。授業実践型②の振り返りでは、自分自身の授業を振り返り、目

標達成や課題解決のための改善策を述べる若年教員Aの姿が見られた(表10下線①②)。そして、ペア教員Cは、それらの発言を価値づけ、実現可能な代案を提案していた(表10下線③④)。まとめや振り返りにつなぐための「めあて」の持たせ方のみならず、形態の工夫など、若年教員の目標達成や課題解決のための方策や手立ての幅を広げることにつながっていた。

表10 授業実践型②の振り返りの記録

ペア教員C:子どもたちが表に「2量の数量関係」を書き込んでいたのがとてもよかった。表を横に見た子は、横に矢印で□倍、縦に見た子は、上から下に□倍と書き込んでいたのがとてもよかった。また、表の数値を自由に設定できるようにしていたのもよかった。10枚ずつで考える子もいれば、40枚の10倍で設定する子もいた。自己調整力ではないけれど、自分の分かりやすい数値を設定することができるというところがとてもよかったです。【承認:よさを認める】

若年教員A:今日の授業では、「比例の関係を使うと、紙を1枚ずつ数えるよりも早く簡単に、400枚を取り出すことができる」というまとめを自分の言葉で書けるようにしたかった。①

ペア教員C:今日のめあては、「400枚を取り出す方法を考えよう」だった。「本当に比例の関係を使ったら400枚を数えずに取り出せるだろうか。」というめあてにしてもよかったと思う。そうすると、A先生が考えていた「まとめ」を引き出すことができたと思う。②【ペーシング:実現可能な代案の提示】

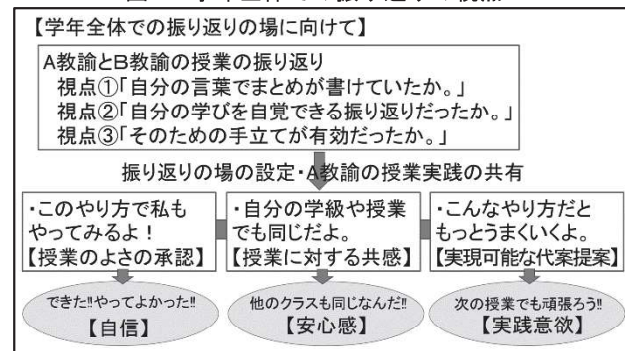
若年教員A:表にどのような数値を設定すればいいのか困っている児童もいた。(中略)前時に扱った(比例の関係を表す)表を提示したり、友だちと交流しながら考えをつくるという形にしたりの方がよかった。②

ペア教員C:A先生も言っているように【共感】(中略)協働で考えて、練習問題で個別に考えるというように、問題によって形態を変えるというのも一つの方法だと思った。④【ペーシング:実現可能な代案の提示】

若年教員A:今回の授業でも「まとめ」を自分の言葉で書くためには、「めあて」を大切にしなければならなかった。そのために、前時とのズレやつながりを振り返る導入の大切さを実感した。【率先垂範による自己改革】

(3) 学年全体での振り返りの実施

図6 学年全体での振り返りの視点



振り返りの段階では、学年での振り返りの場を設定した。若年教員の授業実践の共有を図り、若年教員の授業力向上や成長につながると考えたからだ。また、課題解決のための方策や手立てに対する称賛や承認を促すこと、日頃の授業について一緒に考えることのできる安心感を得ることのできる場にしたいと考えた(図6)。学年での振り返

りでは、若年教員 A の授業実践に対して、学年主任 E や専科教員 F などが、授業のよさ（表 11 下線㉔㉕）のみならず、自分の学級や担当する授業で大事にしている点を述べたり、授業実践が他の教科での学びにつながることを述べたりしていた（表 11 下線㉖）。若年教員 A は、今回の授業実践が、他の教科にも活かされることに気付くことができた。また、授業の見方・考え方を承認・称賛する振り返りの場合は、若年教員 A の自信や安心感、これからの実践意欲につながっていることがうかがえた（表 12 下線㉗）。

表 11 学年での振り返りの記録

学年主任 E: 二人(若年教員 A とペア教員 C)の関係がとてもよかった。㉔【承認:よさを認める】(中略)私から言うとしたら 1 点。「数理」を明確にしておくことが大事。そうすれば、めあて・まとめ・振り返りがぶれることはない。今日の場合は、「比例の関係を使って」だった。A 先生は、明確にできていたよ。㉕【承認:よさを認め自信につなぐ】
専科教員 F: 理科でも(反比例の考え方が)出てくる。てこの働きの学習で、支点からの距離とおもりの重さの関係が反比例の関係になっている。ここで、A 先生の今日の算数の学習が活きてくる。てこがつり合うおもりの重さのきまりを見つける時に、算数の表の見方が活きてくる。㉖【承認:よさを認め、実践意欲へつなぐ】

表 12 学年での振り返り後の若年教員 A のインタビュー

実践した教科(算数)だけでなく、様々な視点から助言をいただき、勉強になった。また、心強い思いになりました。自分が授業を進め上での傾向が明らかになった。持続することで自分の授業の在り方を明確にし、児童の実態を把握することにつながると思った。㉗
--

資料 3 学年での振り返りの様子



(4) 振り返りの進め方の活用

表 13 振り返りの進め方

○授業実践型・授業観察型の振り返りの進め方
～2分間【授業をした先生・目標設定・振り返りシート記入】～ ①ペアで設定した目標を確認する。
②授業をした先生 →ペアで設定した目標に対する自分の授業の達成度がどれくらいだったのか。 →その理由(成果と課題)を伝える。 「達成度は、5段階のうち○です。」「その理由は、～だからです。(成果と課題)」 「達成度を100%にするために、次は～したい。」
③授業を参観した先生 →ペアで設定した目標に対する授業の達成度がどれくらいだったのか。 →感想やアドバイスを伝える。 「達成度は、5段階のうち○です。」「授業の～が良かったです。」「～すると、達成度100%に近づくといいと思います。」「自分の(授業で)は、～してみたい!」
※1回目の授業の場合⇒振り返りでの成果と課題を受けて、目標を付加修正・強化する。 ※2回目の授業の場合⇒「2回の取組を終えての感想」や「これから自分自身の授業にどのように活かしていくのか」「授業づくりに臨む姿のよさ」等を振り返る。

振り返り際には、「振り返りの手順」を提示した(表 13)。その結果、学年教員が、振り返りの進

め方の見通しをもつことができた。これらの取組を通して、振り返りの視点や位置付け方を明確にすることができ、若年教員 A の課題解決につながり、自信をもって授業に臨めるようになった。

7 全体考察

若年教員の授業力の高まりを見るために、自己評価を実施した。表 14 がその結果である。

表 14 「授業力」に関するアンケート結果(4件法)

	A教諭		B教諭	
	6月	12月	6月	12月
授業構想力	3.33	3.00	3.00	3.67
授業展開力	2.63	2.63	2.63	3.25
授業評価改善力	2.33	3.00	3.00	3.67

表 15 若年教員 A のアンケート結果

		6月	12月
授業展開力	⑥子どもに学びを自覚させるための振り返りを位置づけることができる。(振り返り)	2	3
授業評価改善力	③自分の授業を振り返り、よさや不十分さ、改善点を明らかにすることができる。(授業改善)	1	4

授業展開力「⑥振り返り」のポイントは、12月のアンケート結果では、3ポイントに上昇している。若年教員 A が、目標に設定し実践したことが大きな要因だと考えられる。ペア教員 C との実践を通して、「振り返り」の具体的な姿を授業レベルで共通理解が図れたことも関連していると考ええる。また、授業評価改善力「③授業改善」のポイントも上昇している。若年教員 A は、課題解決サイクルを繰り返すことで、「自分自身の授業の課題や苦手なところが見えてきた。」と実践後に話していた。常に自分自身の授業を振り返り、よさや不十分さ、改善点を明らかにして臨んでいた若年教員 A の姿が関連していると考えられる。

表 16 若年教員 A 学級の児童に実施した

授業に関するアンケート(4件法)

授業に関するアンケート ①令和5年10月23日実施(※31人中29人実施)②令和5年12月9日実施(※31人中31人実施)				
項目	10月	12月	関連	
⑤「めあて」を意識した「まとめ」を自分の言葉で書くことで、授業で「何を学んだのか」を明らかにすることができた。	3.38	3.42	まとめ	
⑥授業の終わりで「分かったこと(できるようになったこと)」「よくわからなかったこと(うまくできなかったこと、むずかしかったこと)、もっとかんがえたいこと」などを自分なりにふりかえることができた。	3.17	3.29	振り返り	
⑦学習した内容を使って他の問題などを考える場面や、次の時間の学習への意欲や関心が高まる場面があった。	3.21	3.26	学びの自覚・適用場面	

また、児童が、若年教員 A の授業をどのように捉えているのか見るために授業に関するアンケートを実施した。その結果(表 16)からは、若年教員 A の授業に対する満足度の高さをうかがうことができる。授業実践で目標として設定して取り組んだ「まとめ」「振り返り」「学びの自覚・適用場面の設定」の項目のポイントが上昇している。若年教員 B は、「発問」に焦点を当て実践を行ってきた。6月の1ポイントより12月には3ポイント

に上昇している（表 17）。若年教員 B から、「発問を頑張った。」という感想も聞くことができた。実践を行うことが、若年教員 B の自信につながり、ポイントの上昇につながったと考えられる。

表 17 若年教員 B のアンケート結果

授業展開力	③子どもの考えを広げ深める発問を考えることができる。(発問)	6月	12月
		1	3

課題解決サイクルの実施後、学年教員から、次のような感想が聞かれた（表 18）。

表 18 課題サイクル実施後の感想

<p>○目標を設定することは、授業をしたり、参観したりする視点が明確になった。教材研究や授業実践を通して高めた視点がぶれなかった。(若年教員)</p> <p>○子どもの姿をどのように評価するか、手立てが有効だったかなどを、学年会で話すことでの見方をそろえることができた。これから若い先生方が増えていく中で必要な時間だと思う。(ペア教員)</p>
--

目標設定の段階で、ペア教員とともに目標を設定することは、ペア教員の助言により若年教員が明確な目標設定をすることができ、授業構想力の向上につながると考えられる。また、目標設定をすることで、その後の授業実践や授業観察での見方の共通理解や焦点化につながることが分かった。授業実践型と授業観察型の実施段階では、目標をもとに授業実践や授業観察の視点をペア教員、若年教員ともに揃えて臨むことができることが分かった。その上で、若年教員は、ペア教員のよさを自分の授業に取り入れて授業をやってみる。さらに、授業を続けることで、よさを実感し、自分自身の授業技術として身に付けること、授業展開力の向上につながることが分かった。また、授業実践の際にも授業観察の際にも振り返りの場を設定することは、課題解決のための方策や手立ての有効性を振り返ったり、価値付けしたりするだけでなく、若年教員の課題解決のための方策や手立てを多様に広げることにもつながることが分かった。振り返りの段階では、若年教員が、自分自身の授業を振り返り、自分の授業の傾向等を明らかにすること、授業評価改善力の向上につながると考えられる。さらに、若年教員の授業実践の共有のみならず、授業や子どもの見方、手立ての有効性などの視点で学年教員の実践共有にもつながることが分かった。このように、ペアなどの複数体制による課題解決サイクルを実施することは、若年教員の授業力向上につながると考えられる。しかし、共有のみに留まらず、その後の授業実践等に活かすことができるよう、学年での振り返りの場の持ち方や若年教員への日常的なかかわりが増えるような手立てが今後必要だと考えている。

8 成果と課題

【成果】

○目標設定の場を設けることは、若年教員の授業構想力の向上につながった。さらに、ペア教員と目標を共有することができ、授業実践や授業観察の際の視点の共有や焦点化が図られ、若年教員のニーズに寄り添った授業実践につながった。

○「授業観察型」「授業実践型」二つの課題解決サイクルを位置付けることで、若年教員が、ペア教員の授業実践を自分自身の授業に取り入れたり、課題解決のための自分なりの手立てや方策を考えて授業実践に挑んだり、自分自身の授業の傾向等を明らかにしたりする姿が見られ、授業展開力の向上につながることができた。

【課題】

○授業実践後にペアや学年全体での振り返りの場を設定することは、若年教員の実践共有のみだけでなく、学年教員の実践共有にもつながった。交換授業を行うなど、若年教員の目標を意識した授業の日常化を図るための工夫が必要である。

○学年内という限られた範囲から、学年を超えて若年教員の課題を解決するための多様なペアリングを行い、授業実践を行うなど、授業に対する見方・考え方をさらに広げ、若年教員の授業力の向上につながることができるようにする。

引用文献・参考文献

- 1) 文部科学省 2022 「公立の小学校等の校長及び教員としての資質の向上に関する指標の策定に関する指針改正のポイント」 文部科学省通知
 - 2) 3) 福岡教育センター 2020 「教員が学校で育つ目標と評価を生かした OJT」教員を「育てる」学校から教員が「育つ」学校へ 自ら成長する教員が育つ学校の最適解を求めて 4 項・5 項 福岡県教育センター研究紀要
- 福岡県教育委員会 福岡県教員育成指標（令和 4 年改訂版）
鶴本 健 2020 「魅力ある若年教員を育成する OJT」

備 考

本研究をまとめるにあたり、研修の機会を与えていただき、ご支援いただいた福岡県教育委員会及び北筑後教育事務所、小郡市教育委員会に心より感謝申し上げます。また、昨年度から今年度にかけて、在籍校の校長先生をはじめ、関係の先生方に多大なるご協力をいただきましたことを心から深く感謝申し上げます。